

生誕150年 ロシア最後の “ラフマニノフ” 第2回
ロマンティスト

プログラム

今年が生誕150年の記念の年に当たる、ロシア生まれで後にアメリカに亡命した大作曲家ラフマニノフ。今日は3月の第1回に続き、“ロシア最後のロマンティスト”と呼ばれるラフマニノフ特集の第2回目です。

1873年4月1日、由緒あるロシア貴族の家で生まれたラフマニノフは、4歳の時から母についてピアノを学び始め9歳でペテルブルク音楽院の幼児過程に入学、12歳でモスクワ音楽院に進み、ピアノ、作曲法と和声学を学びました。在学中から作曲も始め、1891年18歳の時に完成したピアノ協奏曲第1番は作品1として出版、音楽院の卒業作品として書いた歌劇「アレコ」で一躍注目される存在となり、さらにモスクワ音楽院を卒業した翌1892年に作曲した5曲からなるピアノ曲集「幻想的小品集」の第2曲の前奏曲嬰ハ短調が特に評判となり、ラフマニノフの名を一気に高めました。ラフマニノフは1893年、強い影響を受け、敬愛したチャイコフスキーの死を悼んでピアノ三重奏曲を作曲、「悲しみの三重奏曲」として知られていますが、ラフマニノフの死後もう一曲の**ピアノ三重奏曲**が発見され、現在ではこちらが**第1番**、従来の作品が第2番とされています。どちらも意識的にチャイコフスキーのピアノ三重奏曲に追随していますが第1番は1891年作曲の単一楽章の作品です。ピアノ教師のかたわらロシア各地を演奏旅行して名声を博していく中、1895年に作曲した交響曲第1番が記録的な大失敗に終わり、強度の神経衰弱と自信喪失から作曲が出来ない状態に陥りますが、精神科医のニコライ・ダール博士の治療によって創作意欲を回復し、1901年に**ピアノ協奏曲第2番**を書き上げ、これが名誉あるグリンカ賞を受賞して大成功を収め、作曲家としての名声を確立しました。1906年の秋から1909年までラフマニノフはドレスデンで作曲に没頭し、名作交響曲第2番を作曲、1909年にはアメリカへ演奏旅行し、傑作ピアノ協奏曲第3番を作曲しました。帰国した後1917年までは主にピアニスト・指揮者として活躍し、ピアノ曲や歌曲を多く手がけました。80曲を超える歌曲を残したラフマニノフの最も有名な作品が「**ヴォカリーズ**」ですが、あまりにも美しい旋律のため様々な編曲版が生まれました。今日はヴァイオリン版とラフマニノフ自身が編曲した管弦楽版をお聴きください。1917年12月、ロシア革命によって誕生した政権を嫌い、パリに亡命したあと、1918年の秋に永住の地と定めたアメリカに渡り、主にコンサート・ピアニストとして活動しました。しかし演奏活動の多忙さと故郷への喪失感によって創作活動は衰えて行きました。この時期の作品として最も知られているのが「**パガニーニの主題による狂詩曲**」で、特に第18変奏の甘美な名旋律は有名です。ラフマニノフ最後の作品となったのが「**交響的舞曲**」で、近年コンサートでの演奏機会が増え、再評価されている作品のひとつです。1931年ヨーロッパでの生活の拠点としてスイスのルツェルン湖畔に別荘を建てますが、ナチスの勢力拡大で滞在が出来なくなり、1942年にはアメリカのビバリーヒルズに移り住みました。そして1942年3月28日、70歳を前にして、この地でその生涯を閉じました。（中川）

セルゲイ・ラフマニノフ (1873~1943):

ピアノ三重奏曲第1番ト短調 “悲しみの三重奏曲”

ユジャ・ワン (ピアノ) / クラウス・マケラ (チェロ) / ダニエル・ロサコヴィチ (ヴァイオリン)
(2023.7.19 スイス、ヴェルビエ教会でのLive)

ヴォカリーズ Op.34の14 (“14の歌曲 Op.34” 第14曲)

イツァーク・パールマン (ヴァイオリン) / ブルーノ・カニーノ (ピアノ)
(1975.8.26 サルツブルク祝祭小劇場でのLive)

アンドレ・プレヴィン 指揮 ロンドン交響楽団
(1975.10.26 新宿・厚生年金会館大ホールでのLive)

パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

ダン・タイ・ソン (ピアノ) / サカリ・オラモ 指揮 バーミンガム市交響楽団
(2002.10.13 オーチャードホールでのLive)

*** 休憩 ***

交響的舞曲 Op.45 ~ 第1楽章、第3楽章後半

キリル・ペトレンコ 指揮 バイエルン国立管弦楽団
(2017.2.20 ミュンヘンでのLive)

ピアノ協奏曲第2番ハ短調 Op.18

エフゲニー・キーシン (ピアノ) / アンドルー・デイヴィス 指揮 BBC交響楽団
(2000.7.14 ロンドン、ロイヤル・アルバートホールでのLive)

曲 目 解 説

ラフマニノフ：ピアノ三重奏曲第1番ト短調“悲しみの三重奏曲”

ラフマニノフはチャイコフスキーの影響を強く受け、尊敬の念を抱いていましたが、1893年11月にチャイコフスキーの訃報を受け、すぐに故人を偲んでピアノ三重奏曲を作曲しました。チャイコフスキーがニコライ・ルビンシュテインの死を追悼してピアノ三重奏曲を書いたように、ラフマニノフもその伝統を受け継いだ形になりました。生前ラフマニノフのピアノ三重奏曲というと、この二短調の作品を指していましたが、ラフマニノフの死後、もう一曲の**ピアノ三重奏曲**が出版され、今日ではこれが第1番、従来の作品が第2番と呼ばれています。**第1番ト短調**は音楽院時代の1891年に作曲、1892年にモスクワで自身がピアノを担当して初演されました。単一楽章の作品ですが、ゆったりとしたピアノのあとチェロとヴァイオリンによる「悲歌」に引き継がれ、最後は葬送行進曲で締めくくります。チャイコフスキーのピアノ三重奏曲を手本にしていることは明らかですが、技巧的なピアノ・パートや哀感に満ちた多彩な音色は後年のラフマニノフに通じる魅力を発揮しています。

ラフマニノフ：ヴォカリーズ作品34の14（“14の歌曲”作品34第14曲）

ラフマニノフは生涯80曲以上の歌曲を残しましたが、最初の歌曲集が1893年20歳の時で、最後の歌曲集は1916年43歳の時作曲された作品38の「6つの歌曲」でした。「**14の歌曲**」**作品34**は1912年に13曲が完成しますが、もう一曲付け加えたいと考えたラフマニノフは、1915年に「**ヴォカリーズ**」を作曲、終曲に追加しました。ヴォカリーズとは「発声の際、歌詞などの言葉や階名を用いず、一つ以上の母音を用いて歌う発声練習法」の事ですが、近代ではドビュッシーやラヴェルにも作品があります。1916年2月6日、アントニーナ・ネジダーノヴァのソプラノとラフマニノフのピアノによってモスクワで初演、成功を収め、作品はネジダーノヴァに献呈されました。初演のあと、提案を受けて管弦楽用に編曲、以来旋律の美しさからさまざまな楽器による編曲が生まれ、ラフマニノフの代表的な名曲のひとつとして親しまれています。

ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲作品43

1917年12月、ロシア革命によって国内情勢が悪化、ソヴィエト政権を嫌って、ラフマニノフはパリに亡命したあと、1918年の秋にアメリカに渡り、主にコンサート・ピアニストとして活動しました。しかし演奏活動に多くの時間を割き、故郷への喪失感も加わり、なかなか創作活動には取り組めませんでした。それでも1931年、休暇で訪れたスイスで故郷に似た土地を見つけたラフマニノフは、ルツェルン湖畔に別荘を建て、作曲を始めました。この時期の作品として最も知られているのが「**パガニーニの主題による狂詩曲**」で、1934年6月作曲を開始し、8月に完成、1934年11月7日、ボルチモアでラフマニノフのピアノとストコフスキー指揮フィラデルフィア管弦楽団によって初演されました。パガニーニの主題というのは、イタリアの伝説的なヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ、パガニーニが作曲した無伴奏ヴァイオリンのための「24のカプリース」第24番の主題のことで、ラフマニノフの他、リスト、ブラームス、ブラッヒャー、ルトスワフスキなどがこの主題に刺激され作品を書いています。狂詩曲（ラブソディ）は叙事的、民族的な内容を自由な形式で表現した楽曲ですが、ラフマニノフはこれを序奏と24の変奏曲に仕上げました。特に第18変奏の甘美な名旋律は有名です。

ラフマニノフ：交響的舞曲作品45

1940年ラフマニノフは夏の休暇中にニューヨーク郊外のロングアイランドで「**交響的舞曲**」を作曲しました。渡米後創作意欲が衰えて行ったラフマニノフのこれが最後の作品となりました。これはトルストイの「サトコ」の望郷の詩から着想を得たもので、郷愁の念と憂うつな思いが入り交じった当時のラフマニノフの心情を反映させています。最初に2台のピアノのための版が8月10日に完成、10月29日に管弦楽版が完成し、1941年1月3日オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団によって初演され好評を博しました。楽曲はオーマンディと楽団に献呈されました。舞曲とはいえ実用的な踊りの性格を持ったものではなく、交響曲の性格を持っています。第3楽章にグレゴリオ聖歌の「怒りの日」が引用され、全体に鋭いリズムと力強い和音に支配されていて、近年再評価が高まっている作品です。

第1楽章 ノン・アレグロ 第2楽章 アンダンテ・コン・モート 第3楽章 レント・アツサイーアレグロ・ヴィヴァーチェ

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番ハ短調作品18

ロシア生まれで後にアメリカに渡ったラフマニノフはピアニストとして出発し名を成す一方、作曲家としてはチャイコフスキーの影響を強く受け、最大の後継者として様々な分野で作品を残しました。1895年22歳の時に完成した交響曲第1番の初演が記録的な大失敗に終わり、神経衰弱と自信喪失から作曲が出来ない状態に陥った時、これを救ったのが精神科医のダール博士で、治療によって創作意欲を回復したラフマニノフは、1901年に**ピアノ協奏曲第2番**を完成させました。初演は1901年10月27日モスクワでラフマニノフ自身のピアノで行われ、大成功を収めると、これが名誉あるグリーンカ賞を受賞し、この作品で作曲家としての名声を確立しました。出世作となったピアノ協奏曲第2番は近代的なピアノ技法の粋を集めた演奏効果を駆使して、全曲を覆う詩的情緒に満ちたロマンティズム、激情するダイナミックなスケール感など、すべてが最良の形で結集された作品で、ラフマニノフの代表作というだけでなく、古今のピアノ協奏曲の最高傑作として認められ、今日最も演奏頻度の高い人気曲になっています。

第1楽章 モデラート 第2楽章 アダージョ・ソステヌート 第3楽章 アレグロ・スケルツァンド